

すがわからでんじゆてならいかのみ

菅原伝授手習鑑

〔解説〕

延享三年（一七四六）八月、大坂竹本座初演。竹田出雲・三好松洛・並木千柳らによる合作。全五段。近松門左衛門の「天神記」を基本とし、当時のニュースである三つ子の誕生などを取り入れ書き下ろした物。二段目に菅丞相と苅屋姫の別れ、三段目に白太夫と桜丸の別れ、四段目に松王丸と小太郎の別れ、と、それぞれの段の切に親子の別れを描いており、「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」と共に、時代物の三大名作として親しまれています。

〔あらすじ〕

【初段】延喜帝の御代、左大臣藤原時平、右大臣菅原道真（菅丞相）が政治の中心となっていたが、反逆心のある時平は、菅丞相を邪魔に思っていた。

帝は病のため、渤海国からの使者に対し、弟君の齋世親王が名代となる。

菅丞相の佐太村（現在の大阪府守口市内）の領地は、白太夫（四郎九郎）という百姓が預かっており、白太夫には、梅王丸・松王丸・桜丸という三つ子がいたが、それぞれ梅王丸は菅丞相、松王丸は藤原時平、桜丸は齋世親王の舎人（皇族などにつかえる下級役人）となっていた。

齋世親王は、天皇の病氣平癒祈願の参拝の折、桜丸と女房八重の手引きで、苅屋姫（菅丞相の養女）と密会をするが、時平の家来が詮議に来たため、親王と姫は、行方をくらまし、その後を桜丸が追う。一方、名筆の誉れ高

菅丞相は、以前、不義の科で勘当していた武部源蔵を呼びだして、菅家の筆法を伝授する。兄弟子の希世の妨害に遭いながらも源蔵は筆法を伝授されるが、勘当は許されない。

時平は、齋世親王と苺屋姫の行方が知れないのは、菅丞相が親王を帝位につけ、娘を后にして、自分が実権を握ろうとしている策略であると、讒言(他人を陥れるため有りもしないことを上の人間に言うこと)する。そのため、丞相は閉門、流罪となる。危険を感じた舍人梅丸は、丞相の実子菅秀才を源蔵夫婦に預ける。

【二段目】桜丸は齋世親王と苺屋姫に追いつき、姫の実家の土師の里へ向かう途中で、菅丞相が流罪になった事を知り、一目会おうと行列の後を追う。安井の岸で汐待ちをしている一行に桜丸が追いつき、対面を願うが、菅丞相の罪が重くなるとして許されない。苺屋姫は、姉、立田の前に伴われて実母覚寿のいる道明寺へ向かうが、役人判官代輝国の計らいで丞相一行も土師へと向かうことになる。また、齋世親王と桜丸は都へと別れていく。土師の里では、覚寿が、丞相が罪に問われたのは苺屋姫のせいだとして、姫を杖で折檻する。それを菅丞相の声に止められるが、不審に思った覚寿が襖を開けると、そこには伯母への形見として丞相自らが彫った木像があるばかりであった。

立田の前の夫、宿弥太郎とその父土師兵衛は、時平に頼まれ、偽の迎えになり丞相を連れ出そうと計画していたが、それを知った立田の前を殺す。偽の迎えが来て丞相を連れて行ったあと、覚寿は立田の前が殺されたことを知って宿弥太郎を刺す。そこへ、輝国ら本当の迎えが来るのだが、実は、偽の迎えに連れて行かれたのは丞相の木像で、人々は奇跡に驚く。そして、全ての悪事が露呈し土師兵衛も殺される。丞相は覚寿や苺屋姫と別れて、名残を惜しみつつ太宰府へと旅立つのであった。

【三段目】梅王丸と桜丸は吉田神社で出会い、通りかかった時平を襲おうとして、舎人である松王丸と争うが、父の賀の祝を済ませてからと、その場は別れる。

〔茶筌酒の段〕祝の日、三兄弟の嫁達、春・千代・八重が集まり仕度をしている。四郎九郎は七十の祝に白太夫と名を改める。

白太夫が八重を連れて氏神参りに行っている間に、梅王丸と松王丸がやってきて喧嘩を始め、白太夫が大切にしている菅丞相の御愛樹、梅、松、桜のうち、桜の枝を折ってしまう。帰ってきた白太夫はそれを見ながら何も言わない。松王丸、梅王丸夫婦が帰った後、納戸に忍んでいた桜丸が現れ、丞相流罪の責任をとって切腹する。八重も後を追おうとするが、物陰に潜んでいた梅王丸夫婦に止められる。白太夫は八重を梅王丸夫婦に託して筑紫へと向かうのであった。

【四段目】太宰府の菅丞相は時平の反逆を知り激怒し、雷神となつて都へ飛ぶ。丞相の御台所は北嵯峨に隠れ住み、春と八重が仕えている。春の留守中に時平の家来が襲来し、八重は討ち死に、御台所は山伏に連れ去られる。一方、武部源藏夫婦は、京のはずれで寺子屋をいとなみ、若君菅秀才を我が子として匿っていたが、これを時平に知られてしまい、首を討てと命じられる。源藏は思いあまつて、その日寺入りしたばかりの子供、小太郎の首を切ってしまう。見分役である松王丸は、その首を秀才の首と認めて帰って行く。そこへ、子供の母親がもどる。実は、小太郎は松王丸夫婦の子供で、身替わりを覚悟で連れてきたという。松王丸も現れ、心ならずも時平に従ってきたが、これでやつと菅丞相の恩に報いる事が出来たと語るものであった。北嵯峨で御台所を救い出したのも、実は松王丸で、若君と親子の対面をする。

茶筌酒の段

別れ行く。

春先は、在々の鋤鋤までが楽々と、遊びがちなる一物作り、一番村では、年古き人に知られし四郎九郎、律義一遍取り柄には菅丞相の御領分、佐太に手軽き下屋敷お庭の掃除承り、松梅桜御愛樹に培ひ水の養ひも、根が物作りの鋤仕事、わが身の老木厭ひなく、幹を肥やしの百姓業、畑の世話より気楽なり。梅王松王兄弟の、女房が来る道草も、女子の手業筌に摘む込み、蒲公英嫁菜、枸杞の垣根を目印に、

「サこゝぢやお春様、マア先へ」

「イヤ〜千代さんから」

と、相嫁同士が門での辞宜合ひ、白太夫をかしがり、
「エ、一時に産んだ三つ子の嫁共、先の後のどこ

ろかい。八重が疾うから待つてゐやる。どちこちなしに這入れ〜、ヤ来た〜〜〜〜〜
ハ、ハ、ハ、

「ほんに八重様早かつた。ござんする道なれば春が所へ誘ふても下さんしよかと、待つた程が遅なはつて心急きな道すがら、千代様に行き合ふて連れ立つて来る道悪戯。今日の祝ひのしたしにと、嫁菜蒲公英二人の仕事」

「それはよう気が付いた。春様誘ふ約束も、日足の長けたに気急きして、寄る事も忘れたに、お千代様とは良い出合ひ」

「サイナ、お春様に逢ふたはわしが仕合はせ。賑やかな道連れ。それはそれぢやが親父様、料理の拵え出来てあるかへ」

「イヤ、出来てない。わご女たちにさす合点。こて

／＼とむづかしい事は要らぬ。今朝搗いた餅で雑煮しや。上置きはしれた昆布、隙の要らぬ様に茹でて置いた。大根も芋もそこにある。勝手は知るまい、ヤアえい、えい」
と立ち上れば、

「イヤ申し、今日の祝ひはお前が目当。料理方の出来るまで、なんにも構はずひと寝入りなされませ。勝手知らねど三人寄つて、なにかも取り出だす」

「さうぢやてゝ立つたついで、棚な物下ろしてやる。ドレ／＼コ、これ見や。祖父の代から伝はつた根来椀ぢや。折敷も十枚、おらが息災なもこの椀折敷。コレ堅地なとて構へて、手荒う当るな嫁女達ハ、ハ、ハ、ハ。このマア倅共は何故遅い、来るまでにひと軒」

と、体を横にさし枕、堅地作りの親父なり。

「コレ皆様。なんぼうあの様に仰つても雑煮ばかりでは置かれぬ。飯も焚かざるまいし、なにはせいででも鰹なます。道草の嫁菜お汁によかる。八重さん千代さん頼みます、この春は飯仕掛けう」

と、手ん手にまな板すりこ鉢、米炊桶に量り込む、水入らずの相嫁同士、菜刀取つて切り刻み、ちよき／＼／＼と手品よく、味噌する音も賑はし。白太夫目を覚まし、

「コリヤ倅共はまだ来ぬか。正月から知れてあるおらが祝ひ日。油断せう筈はないが、ア、この中誰やら、オ、それ／＼。今去んだ十作が話には、時平殿の車先で三人の子供が大喧嘩。『聞いてか』と知らしてくれた喧嘩の様子、エ、ハ、わごりよ達に問ふたら知れうかと思ふた喧嘩の筋、知つてゐても言はぬか。ア、同じ胤腹、一時に生れた倅でも心は

別々。よう似た顔を双子と言へど、それもそれには極まらぬ。女夫子もあり、又顔の似ぬ子もある。マア大概顔が似れば心もよう似て、兄弟の仲もよいものぢや、ガおらが倅共は誰が見ても、一作とは思はぬ。生ぬるこい桜丸が顔付、理屈めいた梅王が人相、見るからどうやら根性の悪さうな松王が面構へ。ヤ千代が傍で粗相言ふた、気に掛けてたもんな〜ハ、ハ、ハ、ハ。マア〜怪我がなうて嬉しうをりやる。怪我ついでに孫めはまめなな、連れて来て顔見せいで。ヤ、とかう言ふ中もふ七つぢや、俺が生れたは申の刻限、料理も大方出来たである。嫁たち膳を出さぬかい」

「アイ、アイ〜。刻限の過ぎるまで連れ合ひ衆はなぜ見へぬ。千代さん、八重さん、道まで往て見て来まいか。こゝで待つより三人ながら、ござんせ往

かう」

「エ、イ、噂達何言ふぞい。子供共は来てゐるわい」

「エ、来てぢやとはどこに」

「どこに」

「エ、鈍な嫁共、そこにゐるを得知らぬかい。コレ三本のあの木が子供等。梅王、松王、桜丸、顔は残らず揃ふてある。ア、勿体ない菅丞相様、くゝめる様に言はしやました。生れ日の刻限が違や悪い、祝儀には蔭の膳も据える習ひ。サア〜早ふ」

と白太夫が、言ふに猶予もなり難く、俄に盛るやら箸打つやら、椀の向ふの小皿にごまめ、

「まづ一番に親父様、これでお座りなされませ」

と、給仕はもとより習はねど、見馴れ聞き馴れ立ち振舞ひ、八重が配膳御所めけり。

「イヤ俺もあそこへ往こ」

「イヤ、土間では冷えが上ります。やつぱりこゝで」と押しそなへ、これから面々夫の給仕膳を捧げて庭に下り、

「この梅の木が梅王殿。杖ぶりずんと日頃の気質」

「八重が連れ添ふ男ぶり。木ぶりも吉野の桜丸」

「これは千代まで添ひ遂げる、女夫が中の若緑、色も艶々勢ひよい。松王殿で子達も揃ふ。サア親父様、目出度うお箸なされませ」

「ア、なされうとも〜。親がひに座が高い。子供どもへ、ドレ挨拶」

「ハテもふ、それには及びませぬ。お加減の冷めぬうち」

「イヤ〜お春、そふでおぢやらぬ。親でも子でも極まつた辞宜作法」

と、庭に下りるもまめやかに、樹の前に畏り、

「子供衆。何もござらずともよう参つて下されい。

親が折角下りての辞宜、ア、コ、辞宜返ししたうても動かれぬは知れてある。こゝで、こゝで、こゝで。ハ、ハ、ハ、鼻達、餅をかやいの」

と尻もちついて

「ハ、ハ、ハ、ハ」

悦び笑ひ。わが膳に押し直り、箸を取るより、

「ア、さて塩梅ぢや、旨い〜。三人の嫁女達、給仕も片意気せぬ様に、三杯は喰ふ合点で、おぢやらしまするぢやなんよへ。こりや、新しい三方土器、誰が持つて来ましたぞ」

「イヤそれは八重さんの」

「テ気がついて、忝ない。春もなんぞくれぬかい」
「ほんに忘れてをりました」

と扇三本袖土産。

「中の絵は梅松桜、お子達の数を祝ふて、三本ながら末広がり、目出度う祝ふてあげまする」

「コリヤめでたいい。中の絵も話で知れた、あけて見るに及ばぬ、このまゝ〜。ハア戴きます」

と機嫌に千代が袂から、

「これは布の有り合ひでわたしが縫ふた手づゝ頭巾。つむりに合はずば縫ひ直さう。お召しなされて下さんせ」

「ア、どれも〜不足もない、心付きなおくりやり物。サ、盃も済んだは。おれが膳からあげても。子供等が膳は盛つたまゝ、冷えたである。盛り直してコレ鼻達、二人前づゝ喰てたもや」

「イエ〜私達はまそつと待つて、主達が見へてから打並んで祝ひましょ」

「そんならそれよ。俺は村の氏神様へ参つて来ま

せう」

「そんならお参りなされませ」

「オ、往きましょ〜。拵へて置いた十二銅、そこにある取つてたも。三本のこの扇、末広ふに子供の生先、氏神へ頼んだり見せたりせう。八重はまだ参るまい。ついでながら連れ立たう。サア〜こちへ」と機嫌よう表を

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。

予めご了承ください。